

福島第一中学校で私が出していた研修だより「拓く」は、次の研修主任に引き継がれ、「磨く」となった。私の後の研修主任から「高澤先生、私も研修だよりを出したいんですが、タイトルは何がいいですかね」と相談されたことがあった。私はちょっとだけ考えて『『拓く』の次は『磨く』だね』と答えた。

次の年も新しい研修主任から「正男先生、研修だよりのタイトルを考えたんですけど、いいの思い浮かびません。どうしたらいいでしょう」と相談された。私はちょっと考えて「明日まで考えてくるから待って」と答えた。

そして、一晩考え、翌日彼女に提示したタイトルが「煌めく」である。我ながら彼女にはぴったりのタイトルだと思ったものである。「拓く」「磨く」「煌めく」と3部作のようにそろった。

いつだったか「煌めく」の彼女が教頭を務める中学校を勝手に訪問したことがあった。校長先生も知り合いだった。校長先生と教頭先生と懇談し、学校内も案内してもらった。ちょうど期末テストの最中であつたが、知り合いの先生方は、「なんで高澤先生が廊下を歩いているんだ」と思ったことであろう。

校長室に戻ると、教頭先生が、ある掲示物を指さした。そこには、「職員室だより『煌めく』』とあった。私の「かがやき」や「薫風」がいろいろな通信のタイトルになるように、彼女の「研修だより『煌めく』」は、彼女が教頭として生き生きと活躍する学校の「職員室だより」になっていたのである。私はそれを見てうれしくなったのを覚えている。何と言っても「煌めく」の名付け親は私なのだから。

〇〇通信や〇〇だよりは、作成しながらあれこれと考えることになる。自然と取り組みが意図的、計画的になっていく。そして、形としてずっと残る。それは記録として、今後活用できるデータ、資料としてである。紙媒体は配布することができる。データはコピーすることができる。私のデータは、何人もの人がUSB等にコピーしていった。

国語科通信『窓』は、国語科の教員はもちろんのこと、国語科教員ではない方もコピーしていった。こういった方は、ちゃんと自分の教科の指導に役立てているものと思う。『窓』は、福島第一中学校の5年間で終わってしまったが、もし、今も続けていたら、もう少し質を高めていけたような気がする。もしかしたら、国語科通信の質と国語の授業力は比例するのかもしれない。

紙媒体やデータがあると、若い先生方に見せることができる。それは、志ある若い教員にとっては、かけがえのない羅針盤となることであろう。私の「国語科通信『窓』」は、そのうち〇〇通信のタイトルとして復活するかもしれない。学校だより、校長室だより、道徳通信、いや、やはり国語関係がいいように思う。

教員になって数年が経ち、大村はま先生の著作を読んだときの衝撃は今も忘れられない。それこそ脳天を叩かれたような衝撃が走ったのである。今一度、教員として勉強し直す大きな契機となった。結局、憧れの「国語科通信『窓』」を出そうと思っていたながら出せなかったのは、自分にそれだけの力がなかったということである。だが、多少無理してでも、もっと若い頃から出しておけばよかったと思うこともある。力のかけ所を間違えてきたのかもしれない。後悔先に立たず。